



街と人

都留文科大学
比較文化学科
2年
水口真澄

文大生の 留都

7

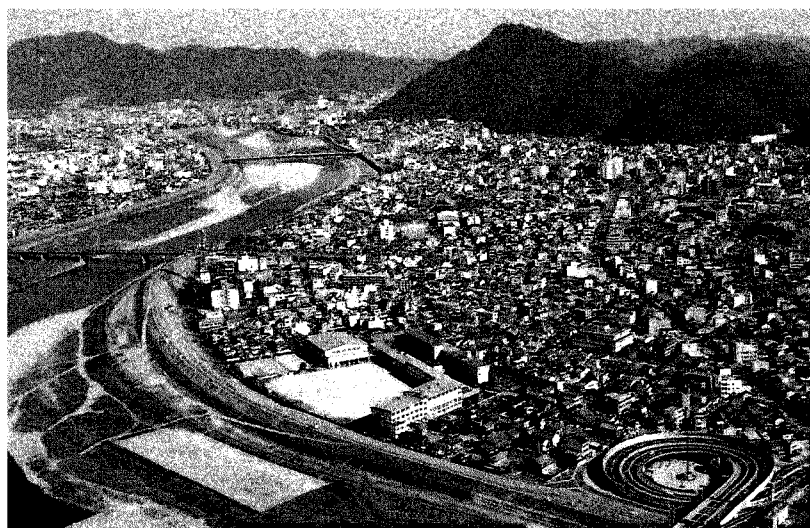
ありがたいことに、大学に
いると本当に様々な人に出会
える。特に都留文科大学には、
日本中からやってきた学生と
つきあうチャンスがごろごろ
している。つきあいづらい人、
外面のいい人、容易に手の内
を見せない人、自分の内面に
閉じこもってしまう人……毎
日顔をつきあわせていると、
人の嫌な面は必ず見えてくる。
もちろん好きなどころも。そ
うやって差っ引いて考えて、
人とうつきあうか決めよう
とは思っているのだが、さて、
ここで考えてみる。「生まれた
土地」と「人間性」って、ど
のくらい関係あるだろう。

たえば、岐阜の人間は
「こり押しする」「自分勝手だ」
と言われることがある。一説
によると、それは生粋の岐阜
弁ではしよつちゅう語尾に
「ええか?」「いいですか?」
という確認の言葉をつけるか
らで、それが自分の意見を無
理矢理通しているように感じ
させるのだという。岐阜も標
準語化が進み、「ええか?」を
聞くことも少なくなつたが、
方言で「県民性」とやらを決
められてしまつてはかなわん
なあ、と正直思う。

ところが、自分も都留の人
に対してそういうレッテルを
貼っていたかもしれないと、
最近気づいた。前述のように、

大学にいると日本中の学生と
つきあう。——かつて都留
の地元の人とふれあう機会は
少ない。だからその少ない機
会の中から何が分かる、と思
うのだが、「都留の人ってキツ
いこと平気で言うなあ」とい
う感想を、ふともうらしくな
ることがある。といつても、
同年輩で都留出身の友人を、
私個人としては持つていない。
私の知る「都留の人」とはみ
んな私より目上の人で、だか
らキツイことも何も、上から
言われるのだから当然という
気もするのだが。

それで何故自分がそう
思つてしまうか自分なりに
に分析してみると、どう
やらやはり方言のための
ようなのだ。都留をはじ
めとして山梨でよく聞く
「しつちやけえ」「しら
あ?」という語尾は、妙
に強圧的に聞こえること
がある。これは言葉だけ
の問題だろうか、それと
も、純粹に個人の人間性
の問題だろうか?



長良川と金華山

なんて、全く滑稽な話だ。基
本的には、「生まれた土地」と
「人間性」は関係ない、と私は
言いきつてしまおうと思う。
それは「性別」とか、「世代」
「職業」と「人間性」は関係な
い、と言つてみることに、根
本的には同じだ。奇妙な、ど
こでいつの間に形成されたか
分からないレッテルをまずは
取っ払つておいて、その人を
その人として見てみたい。こ
れが現在の自分のポリシーだ。
実際に「生まれた土地と人間
性が関係あるかどうか」はこ

の際関係ない。というか、議
論する意味はないと思う。そ
んなことが、誰に断言できる
ものか、と思う。この土地で
生まれ、こういう家庭に育ち、
これこれの経緯をたどつて、
今このようである、と言うの
が本来のアイデンティティで
あれば、ただ「この土地で生
まれ」というだけを取り出し
て人となりを云々することが
いかに無意味であるか、私達
には分かっているはずだ。

都留に引越すことになつ
て嬉しかったのは、水道の水
があまりカルキ臭く
ないことだ。桂川が
市内を堂々と流れて
いるのも、「長良川の
まち」岐阜市民とし
ては嬉しい。桂川に
もたくさん鮎がいて
と言うから、いつか
長良川の鮎と食べ比
べてみたいものだ。
……ほら、こんな
ふうに私達には共通
点がある。人間が住
む限り、共通点のな
い街なんてないだろ
うと思う。お互い似
たところのない人な
んで、ないだろうと
思う。私達は、こん
な他愛もないところ
から、つきあつてい
こう。